



金 融 財 政

2007年(平成19年) 5月7日 (月) 第9829号・合併号 (購読料金 月額税込み5,565円)

経済のコペンハーゲン解釈

お茶の水女子大学教授 篠塚英子



肌寒い3月の平日
真昼、場違いの舞台
観賞で新国立劇場に
出掛けた。マイケ
ル・フレイン作「コ
ペンハーゲン」。登場人物はたった3人。
2人の理論物理学者ニールス・ボーア
(1885~1962)と若きころボー
アを崇拜し弟子となったヴェルナー・ハ
イゼンベルク(1901~76)、そして
ボーア夫人のマルグレート(1890~
1984)だけ。

物語はハイゼンベルクの書物「部分と
全体」(みすず書房訳)にある「私の記
憶が正しければ、その旅行は1941年
の10月に行われた。私はニールスをカー
ルスベルグの彼の私邸に訪れたが、危険
な題目については、夕暮時、彼の家の近
くを散歩したときになってやっと切り出
した」が発端。謎につつまれた1日の訪
問にある「危険な題目」とは何であった
のか。大胆な演劇的解釈を施したこの舞
台は、ロンドン初演の1998年、大反
響を博した。
冒頭、物理学用語と物理学者の名前が
延々と飛び交い、知識ゼロの文系人間に

理解できるかの挑戦である。すでに冥界
にあるボーア夫妻は、ハイゼンベルクが
訪問した本意の意図がいまだに謎で、真
意を探ろうと、あの場面を何度も再演す
る。だが記憶をたどり再演するほどにさ
らなる闇が深まり、終演のベルが鳴る。
文系人間には「コペンハーゲン解釈」
は予想以上の大収穫だった。第1は、「
相補性理論」や「不確定性理論」など
自然界を規定する理論が人間社会にも当
てはまること。対面で話をした相手の言
葉でさえ、明確に確定できない。自然界
より社会科学の対象は一段と複雑だ。第
2に、専門用語は普通の言葉で平易に語
らなくてはどんな立派な理論でも意味が
ない。2人の専門家だけで世界が存在す
るのではないからで、両者を仲介する第
三者が必要になる。ここではボーア夫人
という「女性」を対峙させた点が、意味
深長である。
経済の「コペンハーゲン解釈」として
は、成長か、分配か、という二者択一の
陥穽に陥ることなく、両者は相互に「補
完的」であるとして考えようと説く西岡
幸一氏を紹介しておこう(日本経済新聞
07年4月2日)。

CONTENTS

●解説

流入するリスクマネーの死角(石室 喬)
—拡大続けるエマージングマーケット…………… 2

●BANCO

サブプライムローン騒動(島田精一)…………… 3

●照一隅

発想の逆転(一湖)…………… 5

●インサイド

取引所再構築の足音…………… 8

●世界の金融—西・東 (ニューヨーク)…………… 9

●インタビュー

〈連載〉変わる日本のM&A—三角合併解禁(下)
—佐山展生・GCA代表に聞く……………10

●政経深層 血の連判状(原田憲一)……………13

●国際経済 楽観日立ったワシントンG7……………14

●あと・らんだむ (神崎倫一)……………15

●拍子木 金利水準の評価(志在千里)……………17

●海外誌紙に見る日本の評判……………18

●財政金融ウォッチング〈3月後半〉……………19

●北風・南風 (山梨)……………20